

そういえば、この間、僕と彼女の名前が彫られていた、ボールペンを見つけました。

綺麗な緑色でなよつとした柳のような線がデザインされていました。僕は笑いながら、それを貰いました。もちろん、彼女もそれを僕との記念としてもらいました。

きつとこれから大切にするのであろうそれは、僕たちの間にある絆を作ったかのような、そんな大事なものになったのかもしれない。

そして、これから始まるであろう、世界のことを考えていく、一つのきつかけになるだろうと、誰がわかっていたのだろうと、今にして思えばそれが一番怖い出来事だったんでしょう。

思わず、思い出ししてしまいそうになったことを後悔しながら、夜空を見上げました。

「友達としての距離」

ひとりで歩みたい頃を思い出して、ひとりで楽しみたいことを想起して、思わず笑ってしまった。僕は何もできないでいるのがいつものように笑っているのだろうと信じている。何を言いたいのかはあなたに任せますが。

そんなことをこの前彼女は言っていた。ひとまず、僕は家の中でタオルケットの中にくるまってころころ、横に転がって思い出した。

「ねえ。どうして、私なんかといてくれるの？」

最近、彼女の様子が変だ。僕は彼女のことを真剣に考えていたのは今でも変わらない。そしてこれからも彼女についての考え方は変わらないだろう。でも、それはおかしいことなのだろうか。

僕のことを怪しんでいるわけではないのだろう。ただ、彼女がそこで笑ってくれることを僕はいつも望んでいる。それはかけがえない絆だから。僕は笑っている。いつも、いつでも、いつまでも。

そして。

必要とするならば

答えのない迷路の中にいるかのように

望むことが大切なのだと

誰が教えてくれたのだろう

彼女はよく笑っている。彼女は笑っている。彼女はよくもこんなにもと思えるほど笑っている。彼女の名前を思い出すことのできない僕。そして彼女はついに僕の家に来て来た。

「どうしたの？」

ついさつき、明るい連絡を入れた僕の、表情を軽くして見上げた彼女は少しだけ悲しげに沈

重していた。なにも出来ないと言われたかのように、僕は喪失感を手にしまったのだ。よくこんなにも酷いことができるものだ、心の中で闇を見ていた。

「別れよう」

そして僕はすぐに折り紙を渡す。綺麗に折りたたんだそれはとてもくしゃくしゃにして、彼女の顔もくしゃくしゃになって。

「その折り紙に何を祈ったの？」

そんなことを宣った。

「わからないよ。でもまた、復縁できるよ。でも今は一人にしてほしい」

「わかった。なら、私、あの場所にいるから」

彼女はくしゃくしゃな顔のまま僕の頬にそつとキスをした。

ひとりなんていやだけど

ふたりなんてのभीや

だけどさ

さんにんにならないかのうせいと

ひとりのままのかのうせいは

どちらとも

ふたりにはかてない

僕はずっと会社の中で一生懸命、働いた。昇進、出世、新卒採用時の担当。それらすべてが失われた過去を追いつめているのだと気が付いたのだから。

これからそんな日々が続く。それでも。

ふと、思い起こして、大切にそれ専用につけているケースを見る。

「あー、社長、またそのケース見てるー。みんなあ！　また見てるよ。あの思い出のボールペン」

「うるせい！　そんなことはいいから、お前らは自分の仕事をしろお！」

「はいはい、社長はいつもそんなこと言いますもんね。仕事を貰いに来ました」

「ああ、そういうこと。この書類をデータ化してくれ」

「はい」

美人オフィスレディの足音を聞きながら、僕はそのボールペンを見つめる。

「あいつはまだ、あの店にいるのかな。もしかしたら働いているのかもしれないな」

思い出の中で待つてくれているのは当たり前で、今でも待つてくれているのはわからないけれど。

それでも思い出して、夕暮れ時の空を見上げる。そして素敵なボールペンを今でも握って、

サインを作る。

そしてまた、ボールペンを握りながら、仕事を始めた。

いつものように

いつかのように

いつまでも

とこしえとわずと

つづいていけば

いずれ

出逢えるのだから

それが当たり前だと

今でも信じている